

心の闇との闘い

【聖書】創世記 32章 23～33節

その夜、ヤコブは起きて、二人の妻と二人の側女、それに十一人の子供を連れてヤボクの渡しを渡った。皆を導いて川を渡らせ、持ち物も渡してしまうと、ヤコブは独り後に残った。そのとき、何者かが夜明けまでヤコブと格闘した。ところが、その人はヤコブに勝てないとみて、ヤコブの腿の関節を打ったので、格闘をしているうちに腿の関節がはずれた。「もう去らせてくれ。夜が明けてしまうから」とその人は言ったが、ヤコブは答えた。「いいえ、祝福してくださるまでは離しません。」「お前の名は何というのか」とその人が尋ね、「ヤコブです」と答えると、その人は言った。「お前の名はもうヤコブではなく、これからは イスラエルと呼ばれる。お前は神と人と闘って勝ったからだ。」「どうか、あなたのお名前を教えてください」とヤコブが尋ねると、「どうして、わたしの名を尋ねるのか」と言って、ヤコブをその場で祝福した。ヤコブは、「わたしは顔と顔とを合わせて神を見たのに、なお生きている」と言って、その場所をペヌエル（神の顔）と名付けた。ヤコブがペヌエルを過ぎたとき、太陽は彼の上に昇った。ヤコブは腿を痛めて足を引きずっていた。こういうわけで、イスラエルの人々は今でも腿の関節の上にある腰の筋を食べない。かの人々がヤコブの腿の関節、つまり腰の筋のところを打ったからである。

【序】ヤコブの帰郷

ヤコブに家督を横取りされた兄エサウは激しく怒り、ヤコブを殺すと息巻きました。ヤコブは北に 1000 km も離れた母の実家に逃げ、伯父ラバンの世話になりました。ラバンはヤコブ以上に知恵の働く人で、ヤコブは幾度もただ働きをさせられましたが、それでも 20 年間働いて、ラバンの娘二人を妻とし、側女も 2 人持ち、12 人の子どもの親となりました。また数多くの羊・山羊・牛・らくだ等と、その世話をする奴隷たちを持つようになりました。

するとラバンの息子たちが、ヤコブは自分たちの父の家畜を奪っていると騒ぎ出しました。ラバンの態度も変わってきました。盗人呼ばわりされて、丸裸で追い出されるかも知れません。神さまもこれが潮時と判断されたのでしょうか。父祖の地、故郷に帰れとヤコブにお命じになり、ラバンにもヤコブを穏やかに帰すようにと命じて下さいました。

こうしてヤコブは、いよいよ父イサク一族の相続者としての役割りを果たすべく、カナン
の地に戻ることにしました。しかし気になるのは兄エサウです。カナンの遙か南エドム
に暮す彼に先ず使いを送り、帰国の挨拶を伝えました。すると従者 400 人を連れて迎えに
来るとの報告です。ヤコブは恐怖に襲われます。兄を宥めるためにハランで蓄えた家畜の半
分を、贈り物として先に行かせ、もしも襲われたら残り半分と共に逃走することにしました。
そして必死に祈りました。

【1】格闘の相手

「どうか救ってください。兄が恐ろしいのです。攻めて来て子供もその母も殺すかもしれ

ません」(32:12) 兄に殺される——この恐れは 20 年前に家から逃げ出した時以来、ヤコブの心を脅かし続けてきた**心の中の闇**でした。エサウが従者 400 人を引き連れて向かってくる——いよいよその**恐れが現実となる**のです。

ヤコブは夜になって家族全員と**ヤボク川**を渡りましたが、自分だけ一人で 引き返しました。そして川のこちら側で「**何者か**」と一晩中**格闘**したのです。ヤコブは股関節がはずれる怪我を負いますが、くじけずに格闘を続けました。「夜が明けるから去らせてほしい」と相手が言っても「祝福して下さるまでは離さない」とかじりつく手を放しませんでした。

するとその人は言いました。「お前の名はもうヤコブではなく**イスラエル**と呼ばれる。お前は**神と人と闘って勝った**から」ヤコブは相手を確認したいと思いました。「どうかあなたのお名前を教えてください」「どうしてわたしの名を尋ねるのか」そのお方は名乗る代わりに、**祝福**して下さいました。人間を本当に祝福できるのは神さましかおられません。ヤコブはそのお方が**神さま**であると、確信できました。この格闘の相手は**神さま**——するとヤコブは一晩中神さまと格闘したのでしょうか。

最後に祝福を下されたお方は確かに神さまです。でも「お前は**神と人と闘って勝った**」とおっしゃっています。ですから「夜が明けるから去らせてほしい」とヤコブに頼んだ所までは、**格闘の相手は人**でした。それが**最後の段階**で、**神さまに変わった**のです。そして神さまがヤコブに負けて下さって、祝福をお与えになったのでした。

では、ヤコブが一晩中格闘した人間は、**何者**だったのでしょうか。それは兄の復讐に恐れおののく**ヤコブ本人**だと、私は受け取ります。困難に直面しても、才知を働かせて積極的に生きていこうとするヤコブの心の中に、父を欺き兄の祝福を横取りした重い罪を悔み、兄の復讐と死を恐れ続ける**闇のヤコブ**がいて、この**二人のヤコブ**が必死の格闘を続けたのです。この 20 年来の格闘に決着をつけるために、明け方になって神さまが**闇のヤコブ**に入れ替わり、**明るいヤコブ**と格闘して**負けて下さった**のです。

そして神さまはヤコブに**新しい名前**をお与えになりました。エサウとヤコブは双子でした。先に生まれるエサウに遅れまいとして、彼のかかとをつかんで生まれたので「**かかと (ヤコブ)**」と名付けられました。「人の物を握って放さない、人を押しつけてよいものをせしめる」という名前です。このヤコブが 成人してからその**名前通りに**、老い衰えた父をだまして兄エサウへの家督相続を横取りしてしまいました。

イスラエルとは「**神励む**」「**神治める**」という意味だそうです。事ある度に、ヤコブの心の中で**二人のヤコブ**の格闘が起こります。しかし神さまがそのようなヤコブの内で力をふるい、**神さまに治められる人間**へと変えて下さるといなのです。ヤコブは**心の中の闇**と格闘して、とうとう**勝利**したのでした。

ヤコブは神さまから**祝福**をいただいて、神さまが共に居て下さるという**心の平安**を得ました。殺されるという**恐怖心**が取り除かれ、明るいい心をもって朝日の昇るヤボク川を渡り、家族たちと合流します。そしてエサウと従者 400 人がやって来ると、**先頭に進み出て**ひれ伏して出迎えました。**エサウ**はヤコブを**抱き締め**、首を抱えて口づけし、共に泣きました。

〔2〕自殺に追いやる心の闇

信頼が裏切られた時に、私たちの人間関係は深く傷つき、壊れてしまいます。そればかりか、その後の人生に**大きな狂い**が生じます。**人間不信**に陥り、他の人との交わりも悪くなり、次第に**孤独**になります。多くの中学生が国語の授業で学ぶ**夏目漱石**の「**こころ**」の主人公は、父親の死後に叔父から財産を横領されて**人間不信**になりました。そして帝国大学を卒業しながら、積極的に生きて行く意欲を失っていました。

ところが下宿先の自分の部屋においてやった友人の**K**から、下宿の娘さんに心がひかれると打ち明けられるや、それまで優柔不断だった彼が、「お嬢さんを下さい」と母親に直接交渉をして、**K**を出し抜きました。気が咎めて**詫びなければ**と思うものの、**自尊心**がそれを許しません。迷いながら縁談が進むうちに、突然**K**が**自殺**してしまい、詫びる機会が永久に失われてしまいました。

幸福であるべき新婚生活に、**K**への思いが**黒い影**となってつきまとい、彼をおびやかします。自分もまたあの叔父と同じく**許されざる人間**ではないか。そのことに気付かされた時、彼は**闇に突き落とされる思い**に襲われました。誰からも切り離された孤立・孤独感に捉われます。これではいけない、妻と一緒に新しく生きていかなければと意欲を奮い立たせようとすると、**虚無感**にぐいと握りしめられて**ぐたり**となります。自分のようにずるいことをした人間は、幸福になってはいけないのだという思いが、彼の**心をしめつけて**、身動きできない無気力さに、引きずり込んでしまうからでした。彼は遂に**遺書のかたちで告白**し、妻には決して見せぬことと書き添えて**自殺**してしまいました。

ヤコブは兄の復讐がいよいよ迫って来たと感じて、**死の恐怖**に襲われ、もがき苦しみました。しかし「**大丈夫、新しい人間に変えられていくよ**」という 神さまの語りかけを聞いて、平安を得ました。ヤコブは、山羊の群れ、羊の群れ、らくだの群れ、牛の群れ、ろばの群れの贈り物を、間隔をおいて次々とエサウに差し出してご機嫌を取り結んだ上で、**最後にヤコブ自身が進み出てお詫びをしよう**と準備を整えていました。しかし、夜通し闇の中で格闘した翌朝、朝日を受けてヤボクの渡しを渡ったヤコブは、自分が**先頭に進み出て**エサウにひれ伏しました。そして和解してもらいました。そして**イスラエル 12 部族の始祖**となる役割りを果たして、147 年の生涯を終えました。

私たちは自分の罪深さや、人の悪によって**窮地に立たされた時**、苦しみがあがきます。その時の祈りは、自分を呪ったり、人や世間や神さままで呪って、**わめき散らす**ことから始まり

ます。祈りとは言えない**荒れた叫び**です。でも格闘する相手がいつの間にか**神さまに代わっていく**のです。そして神さまが私の叫びを**全部受けとめて下さり**、私たちのあがきと最後までつき合ってくださいることが分かってくるのです。

私たちがあきらめずに武者ぶりについて離れなければ、最後には**私を勝たせて下さり**、**私という人間を変えて下さる**、そして**お前は神にも勝ったよと喜んでくださる**——神さまはそういうお方なのです。「ヤコブがペヌエルを過ぎたとき、**太陽が彼の上に昇った**」何と素晴らしい言葉でしょう。太陽が彼の上に高く昇り、彼を締め付けていた**心の闇**は消え去りました。**新しい神体験が新しい自分の誕生**を もたらしてくれたのです。

【結】 神によって変えられる人生

「**三つ子の魂、百まで**」と言います。人間の性質は年をとっても変らない——これが世間の常識です。でも皆さん、私たちは**変れる**のです。兄のかかとをつかんで生まれてきたヤコブが、**神さまが治めて下さる人間**（イスラエル）へと変えられました。新しい人間になれるのです。そして**新しい人生を歩む**ことが出来るのです。

神さまは私たち一人ひとりを、ご自分に似せて創造して下さいました。しかし私たちの心には、神さまに聞き従って生きることを拒み、**自分の思いのままに生きよう**とする罪深さが生じました。その結果、私たちの内にある**神の姿**が損なわれ、誰しものが**心の闇**を持つようになりました。

ヤコブは心の闇と激しく格闘して腿の関節がはずれ、生涯歩き方が少し不自由になりました。これは父と兄をだました罪を**生涯忘れずに謙虚に生きる**ようにとの神さまの配慮だと、聖書教育に書かれていました。ユダヤの歴史で最も優れた王**ダビデ**も大きな罪を犯しました。預言者ナタンに厳しく指摘された時、王の衣を引き裂いて祈っています。「神よ、わたしの内に**清い心を創造し、新しく確かな霊**を授けてください」（詩編 51：12）

命は神さまの手によって創造され、私たちに与えられます。**命を新しくして下さる**のも、神さまによる以外にありません。ヤコブは、私たちも祈りを通して**新しい人間に変えられていく**こと、そして神さまから与えられた**自分の使命**を、生涯かけて果たしていく祝福を、見事に教えてくれています。皆さんは神さまから与えられている**人生の使命**を自覚して、生きておられますか？

どんなに荒れすさんだ叫びであっても、神さまに**武者ぶりについて祈る**ならば、神さまは必ず私の相手をして下さり、祝福を授けて下さいます。 完

